八重山ミンサー

Yaeyama Minsa

通事孝作

はじめに

沖縄県の南端に位置する八重山の島々には古くから“帯の文化”が息づいている。それは石垣島、竹富島、小浜島、西表島で織られている、ミンサーと呼ばれる緋模様の木綿細帯である。与那国島ではカガンヌブと呼称され、模様には違いはみられるものの、素材、織り方などについてはミンサーとほとんど同じである。

竹富のミンサー・石垣のミンサー・与那国のカガンヌブ
(写真の上から)

ミンサーは綿布の一種で今では日常の普段着に用いられることはほとんどないが、豊年祭や種子取祭などの奉納芸能および婦人芸能大会の出演者、祭祀への参加者らによって締める場面が見られる。

木綿細帯は沖縄では八重山のほかに、那覇市の首里、読谷、石川などで継承されており、それぞれ首里ミンサー、読谷ミンサー、伊波メンサーの名で呼ばれている。図柄は島や村の歴史・文化・風土を反映して、各島・各村で異なる。八重山ミンサーは、特に竹富島のミンサーが知られている。それは四つの緋柄、五つの緋柄を交互に配し、深海を想起させる藍の色合いと、直線で構成された白い緋模様が気品のある世界を醸し出している。

TOJI KOSAKU
竹富町役場 町史編集室
編集係長 法学士
〒907-0001 沖縄県石垣市字大浜 157-4
Tel: 0980-83-7456
E-mail: toozi-k@town.taketomi.okinawa.jp
〈専門〉八重山地域史研究
〈趣味〉モダン・ジャズ鑑賞

ミンサーは服飾文化の一翼を担い、芭蕉布・上布とともに生活文化を色濃く表現している。近年、創意工夫を凝らした袋物・テーブルセンター・財布などの小物にパリエーションに富んだアレンジ製品が作られている。しかし、元来、日常生活のなかで“帯”として使用されていたのである。染織については藍染め以外の草木染めミンサーもみられる。腰に固く結ばれ、衣裳を引き立てるミンサー、民俗芸能で脚光を浴び、踊り手の腰に巻かれて演じられる舞踊を見ると、現代に生きる染織の神髄を垣間見るようである。

1. 語源と呼称

八重山ミンサーは綿糸を用いた藍で染めた平織りの細帯であることは知られているが、その語源となると定説がない。「綿狭」という説と、「綿紗」という説があり、未だに不明である。「綿狭」説は、「真田帯のような幅の狭い木綿布。多くは帯(ミンサー・ウビイ)にする。めんさおり＝綿狭織の下略ではなかろうか」と説く。ちなみに、真田帯とは細幅織物で紐に用いられる真田織りの細い男帯のこと。幅は一寸～三寸ぐらいで、平織りや綾織りで縞柄を表している。主として綿を用いるが、麻を使うものもある。一方、「綿紗」説は、「中国と沖縄との歴史的交流、緋の伝播のルートから考えて綿花糸で織ったものは綿紗という。中国の辞書には綿紗は、絹の糸のような細い糸のこと」として語解している。

ミンサーの呼称については、1960年代まで「ミンサー」のほか、「みんなあ」、「みんなー」、「みんな」、「ミンサ」と確定していなかったが、1970年代に入ると、「ミンサー」に統一されている。以後、呼び名が「ミンサー」に落ち着き、現在に至っている。

2. 起源と伝来

ミンサーは、原型が藍染めによる緋模様であることから、緋の一種である。緋はアジアで発達した図柄であり、確かな源流は明らかではないが、6世紀のインド・アジャンタ洞窟の壁画のなかに確認されている、といわれる。少なくとも、インドを中心にしてアフガニアン、チベット、中国、東南アジア各地に伝播したと考えられている。沖縄の緋がどこから、いつ伝播したのかは判然としないが、中国、東南アジアの影響を受けたことは確かであろう。

沖縄では織物の模様、図柄のもっとも代表的な織物は緋

竹富島の種子取祭で演じる婦人たちの締めるミンサー

である。「紵は織物の原料となる糸を白と黒に、あるいはその他の色彩に括って染め、それを経糸、緯糸にして織り出した一定の連続模様を指すものであり、それは紵模様に対する語である」などといわれる。紵は直線と曲線を自由に变化させ、組み合わせることによって、さまざまな図柄を作り出していく。デザインのモチーフは、雲・星・動物・植物と、日常生活で使用する道具など極めて変化に富んでいる。

沖縄の紵は中国、東南アジアの二ルートでもたらされ、独自の発展を遂げたといわれる。ミンサーの起源や伝播経路については、先人の研究によると、「石垣市、竹富町の八重山ミンサーと、与那国町のカガンヌブは同一系統にあり、その起源はアフガニスタン地方にある小さな紵がチベット、中国を経由して伝来してきた」といわれ、「読谷ミンサー、首里ミンサーは東南アジアの紋織りの影響を受けたのではないかと推察する。読谷、首里の場合は、竹串を用いたグーシ花と呼ばれる織り技法で紋様を出していることに特徴をもつことから、東南アジア経路だとみている。

八重山ミンサーは、その素材が木綿糸である。そのことから木綿栽培を概説すると、沖縄の木綿の栽培は1611年(万暦39)、儀間真常が薩摩から木綿を持ち帰って栽培したことに始まる。その後、収穫した綿花で大帯を織らせた。17世紀には木綿栽培が定着し、織物の原料として用いられるようになった、といわれる。八重山では遅れて大浜安師(大城与人)が流罪で慶良間諸島に滞在中、島びとの綿織物を見て大いに感激し、綿花のほぐし方、製糸法、綿布の織り方などを稽古し、1634年(崇禎7)に放免されて帰郷した後、島の人々に初めて木綿の織り方を伝授したとされている。木綿栽培に伴い、ミンサーが織られたといわれるが、確かな起源は定かではない。

八重山に木綿の栽培法が伝来すると、白木綿布、紺地木綿布などが貢納布として首里王府に納められた。しかし、貢納布の記録にミンサーが見られないことから、ミンサーは上納されなかったと推測されている。琉球王府時代には身分により衣服や帯の材質が決められており、木綿は貴重な織物繊維であり、基本的に上流階級のものであった。その当時、庶民は苧麻や芭蕉の植物繊維を素材にした衣服を

着けていたことから、上流階級が用いる木綿を素材にしたミンサー帯を締めることはなかったであろう。庶民は身の回りにある細長いものを腰に巻き付け、帯替わりにしていたと推測される。ミンサーが普及したのは木綿が広く流通し、士族、平民という身分制が崩壊した明治初期以降ではないかとされる。

経紵木綿細帯であるミンサーを歴史的に考えるには史料を探索するが、ミンサーと想定できる言葉が出てくる史料は決して多くない。一つめは「子年惣横目平得首里大屋子上国之時檀那方江進上物賦り帳」という1876年(明治9)石垣市豊川家の近代文書、二つめは「みんな緒 一筋目出度や 酒や 色やなき」の文言のある「時憲書」という、1873年(明治6)の石垣市竹原家の近代文書、三つめは石垣市の旧家・宮良殿内の血統をひく士族役人だった宮良當整が残した「必要書類集」という近代文書の三つが確認されているだけである。

一つ目の豊川家文書は、長興姓第九世の豊川善庸が平得首里大屋子という行政官に任命され、野里仁屋と称していた次男の善政とともに、琉球王国の王府・首里に登ったときの進物の贈り先のリストである。このなかに八点の「めんさ」あるいは「めんさあ」の記録がある。

二つ目の竹原家の文書は、記録にみえる「みんな緒」とあるが、このなかの「緒」は帯ほどに幅が広くなく、むしろ狭い紐のようなものを指しているようである。ただ、文書に「めんさ」、「めんさあ」の文言があるからといって、われわれが考えているミンサーと同じであるか、どうか分からないが、「めんさ」あるいは「めんさあ」は、士族のものであったこと、男から男・女ともに贈られる物であった、八重山の特産物であった、めでたい場所で使用された、ということが分かる。

三つ目の「必要書類集」の記録は、荒波で転覆した船から失われた荷物の「流失取調書」の報告で、このなかに「めんさ帯壹筋」の文言がある。流失物は一覧表になっていて、その見積金額が記されているが、「めんさ帯」は芭蕉布、鏡、手帳より低い一銭五厘である。また、兵児帯壹筋は見積金額一円であり、「めんさ帯」よりかなり高いことから、「みんな帯」は紵でも綿でもなく、無柄で色も染めていないお粗末のものだったのかもしれない。

近代文書のほかに、『南島探験』の著者・笹森儀助が調査し、八重山島役所がまとめた「沖縄県群島之内八重山島之部」という報告書に「メンサー」の記述がみられる。このなかの「衣」について、メンサーと称する紺木綿真田織様の自分織りを用いるとあることから、ミンサーは帯であること、素材は木綿であること、紺色(藍染め)であることが分かる。そして、それは自分織りであることから、人頭税として賦課されたものではなく、商品でもなく、私用物だった。また、ほかの文献資料では、士族の中流家庭の嫁入り支度では、花嫁はミンサー帯を十本前後も用意したこと、結婚前には親しい友人から贈り物としてミンサーをもらっていること、士族の女性、男性は労働着にミンサーあ

るいは細いしごき帯を締めていた、などとの記述がある。

3. 特徴

緋は経緋、緯緋、経緯緋の三種類があるが、作り方の基本は、防染箇所をビニール糸などで強く括り染色する手括りにその特徴がある。ミンサーは、木綿糸を素材にした染織で、白い部分を残して染める、括り染めの経緋の織り技法をもつ。八重山ミンサー・カガンヌブは、手括りの染色法を有し、図柄は幾何学模様には特色がある。それは、八重山ミンサーは五つの緋柄、四つの緋柄を交互に配し、帯の両耳にはヤシラミ織りを組み込み、カガンヌブは二つの緋柄をあしらい、両耳に段々縞がある。

八重山ミンサーの五つ柄・四つ柄は図柄のパターンだが、それは綿布のひとつとして女性から男性へ愛情表現として贈られた、ということである。換言すれば、これは通い婚の時代の風習を残し、男性の求愛にたいして、女性がその愛を受け入れた“証拠”として自ら織り上げ、男性にプレゼントする最高の贈り物ということにつながる。言語学者・宮良當壮は「石垣島には婚礼の時、花嫁の苞と云うものがある。即ち、花嫁が花婿の家族並びに近親の者に贈る土産であって、これには以前はミンサー・ウビィと称する帯を用いた。ミンサーは木綿糸で扁たく厚く織った鯨尺幅1寸5分、長さ5尺2寸ほどの真田帯に似たもので、中央に黒、其両側に市松・藍白・黒の縞がある。昔の花嫁さんは木綿花や藍を畠に作り、原料の取得からこれが織り上げまで悉く自分の一箇の手によって丹念にやったと云うが、近年斯かる労苦を致す者がいない。のみならず、ミンサーの影も漸く消え去ろうとしている。今から20年～30年前まで石垣島にはまだ一般に木綿が行き渡っていなかった。田舎の農民などは綴衣に綱帯という身形で立ち働いていた。稀に是等の人々が新しいミンサーでも締めていると、其家族若しくは親戚に花嫁を迎えていたことを知るのであった」と説明する。大正期から昭和初期のことであった。西表島西部の網取村では、袴の紐にする細い木綿の帯が織られ、ミンサーと呼ばれていた。

ミンサーは、愛情表現として女性から男性への贈り物であるが、それがある種の解釈を生み、恋愛ドラマを彷彿させるような意味づけを提供した。ミンサーは白色と藍色の模様が原型にあり、それには三種の模様がある。模様には、それぞれ特色をもち意味を含んでいる。外側から内側に向かって、まず白と藍の繰り返し模様が二列になって続いている。これがムカデの脚を連想させることからムカデアシと呼んでいる。次に二本の線があるが、これをタテスジという。主模様は中央にある四方形を五つ合わせた形(五つ玉)と四つ組み合わせた形(四つ玉)が交互に並んでいる。

この図柄にはひとつの物語がある。ムカデアシは、足繁く通って来てほしいという願望が込められている。タテスジは、道を踏み外すことなく、末永く、愛を育ててほしいという意味を有する。五つ玉、四つ玉の模様は、「いつの世までも」の語呂合わせになっている。ひとつの織物に、

このような三種の意味を込めた人々の心意気は、さぞかし強かったであろう。果たして、だれがこのような意味づけを行ったのであろうか。織物に対する愛情とともに、織物への歌心、詩心を感じてしまうのである。カガンヌブの二玉模様は夫婦緋で、両耳の縞はミンダァチャミ(千人足)と呼ぶ。

ミンサーは、五つ玉・四つ玉、タテスジ、ムカデアシが図柄の特徴で、それぞれに意味づけがされているが、それは後のことである。歴史的にみると、記録として結婚式の贈り物は別として、労働着や下着、子供の普段着の場面にミンサーが登場している。士族も平民もミンサーを締めていたことは明らかだが、考えられることは緋が入っているのは士族が使用し、無地や縞模様のものは平民が使用していたということである。それが、今では上記した図柄に固まったのである。

4. 技法と工程

ミンサーは、素材が木綿で平織りの縦緋模様の細帯であることを踏まえ、技法および工程を考える。布を織るのに機という道具を用いるが、それは種類により発生の条件が異なる。最初は原始機、そして地機、高機へと複雑に高度化していく。三つの構造的な違いは綜統にあるといわれる。

原始機は、経糸を輪状に整え、座って織ることができ、糸を無駄なく使うことができる。数本の横棒だけで織り上げることが可能で、ミンサーを織る機のルーツだといわれる。地機は、原始機の織技が受け継がれ、綜統が一枚でしかも上方だけに動く。経糸と緯糸がしっかりと噛み合い、風合いのよいミンサーが織れる。使用法は、床に直接座り腰を使いながら織る。また、手締めと呼ばれる、長い杼を直接糸に巻き付け、それを杼として用いながら箆のように緯糸を打つものにも使う技法がとられていた。現在では普通の高機と同様に杼と箆が独立し、杼には緯糸を巻いた管を装着して製織する場合がほとんどである。

高機は、原始機や地機とは違い、椅子に座って織るため能率がいい。今ではほとんどこの織機でミンサーを織り仕上げる。

ミンサーを織るには、まず糸の風合いをよりよく生かす

高機で織られるミンサー(竹富島)

す密度と、組織の選択を含め配色を考える、意匠デザインを確定することから始まる。そして、糸の不純物を取り除き、染色しやすくする、糸の精練などの準備に取り組む。その後、経糸に必要な糸量を計算し、糸車で大管に巻き取る。そして、整経、経糸の水張り、拵括り、藍染め、拵解き、カチタミ(糊張り)、仮箴通し、経巻き、綜統通しと箴通し、織り付けと順序よく作業を行い、緯糸を入れて製織となり、手締めミンサーが仕上がる。

5. 普及と用途

八重山ミンサーは拵模様的特色があり、今では島々の伝統工芸として浸透しているが、戦前においては庶民が締めていたことは少なく、商業的には需要が漸次減退し廃れていった。しかし、戦後、1950年代に入って民芸運動に参加した本土の人たちの来島が、島民にミンサーに対する新しい刺激を与えた。最終的にはミンサーを八重山文化のシンボルにまで高めた。

ミンサーが現在のように発展する契機を作り出したのは1957年(昭和32)に竹富島を訪問した民芸協会の同人、外村吉之介であった。外村は民芸運動で活発に動き、倉敷民芸館を開設し、織物を教えたり、工芸を日本本土や沖縄で奨励したりしていた。三日間の竹富島の滞在で織物だけでなく、島の家屋、歌、踊りなど島の生活にすべてに感激した。そして、島の人々に自らの生活文化や伝統の意義を意識化させた。1958年(昭和33)にはミンサーの復活のための最初の講習会が開かれた。外村は、倉敷から綿糸を竹富島に送り、藍染めをし、織り上がったミンサーを買い上げるという形で竹富島との関係を持ち続けた。島びとによる意識的な取り組みと商品化を図ることは、ミンサーを復活させることであった。1964年(昭和39)の日本民芸協会全国大会では那覇市での大会を終えて、同人40人による八重山視察が行われた。竹富島では一行を歓迎し、視察の間に地機でミンサーを織る民芸のデモンストレーションが行われ、民芸の島・竹富の評価が確実なものとなった。これらのことがベースとなり、ミンサーは普及し、伝統工芸において金字塔を打ち立てた。

ミンサーは、庶民の間に洋装が浸透した現在、帯として

生活のなかで使用されることはほとんどないが、それは民俗芸能の世界のなかで息づいている。祭祀での奉納舞踊および狂言でミンサーを締める演目が数多くあるが、出演する男女は庶民の役柄設定である。この人たちは、近世八重山においては平民と呼ばれる人たちである。竹富島の最大の年中行事・種子取祭の場合、「じゅっちゅう」「竹富口説」「スル掬い」「鍛冶工狂言」などを演じる男女がミンサーを締めている。奉納芸能以外では婦人会による芸能大会でも島に残る数多くの伝統芸能が披露されるが、このときもミンサーを締める演目は、庶民の労働を舞踊化した踊りに限られている。

ミンサーは芸能の世界にとどまらず、生活文化のなかで新たな展開をみせている。八重山では1972年(昭和47)の本土復帰の前後に観光産業が隆盛の兆しをみせ、それに伴いミンサーを観光客用の土産品として産業化を図ろうという動きがみられた。1973年(昭和49)には沖縄県の条例制定と同時に、ミンサーは県の伝統工芸品に指定された。1989年(平成元)にミンサーが「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」(以下・伝産法)による伝産品としての指定を受けると、石垣島、竹富島、小浜島などで織られているミンサーは「竹富ミンサー」などの名ではなく、一括して「八重山ミンサー」の名称になった。伝産法指定の八重山ミンサーは、経糸24本の親と子、拵柄2cm、拵間9cm、幅上がり9cm、長さ一反15m20cm、経糸番手20/2、緯糸番手20/3、20/6、20/8、10/1数本引き揃え、または麻糸、染色は琉球藍、インド藍、その他の植物染料を用いる。拵模様は、帯一本の長さのなかに拵15玉以上入れる、となっている。

伝産法に基づくミンサーの伝産品指定は、これまでの観光土産品と連動して、産業化に弾みをつけた。それは、本来の細帯ミンサーに新たな命を吹き込み、今では拵模様を生かしての八寸帯、さらに藍染めの紺色にこだわらず、黄色、エンジ色などの色合いを出す草木染料を用いたバリエーションの織物がみられる。それはミンサー模様が半帯、テーブルセンターや袋物、財布などの小物に取り入れられ、シャツ、帽子などのミンサーウェアとして八重山で生産されている。また、公共施設にもミンサー模様を取り入れたタイルなどがあり、各方面で利用されている。